

夫婦で挑む小型機船底びき網漁業

—新しい漁業のカタチ—

富津漁業協同組合女性部

平野 典子

1. 地域の概要

千葉県富津市は房総半島の中西部に位置し、東京湾に面している。南房総国立公園に指定されている富津岬の先端には東京湾と富士山を同時に一望できる明治百年記念展望塔を有するなど、自然や景観の名所が豊富な地域である（図1）。

また、東京湾アクアラインや館山自動車道等高速道路の整備により、首都圏からのアクセスが良好であることから、潮干狩りや海水浴、ハイキングなど多くの観光客が訪れる地域となっている。

市の北部には京葉工業地帯が広がり、産業別就業人口の割合は第3次産業が約6割、第2次産業が約3割、農業と漁業を主体とした第1次産業が約1割となっている。

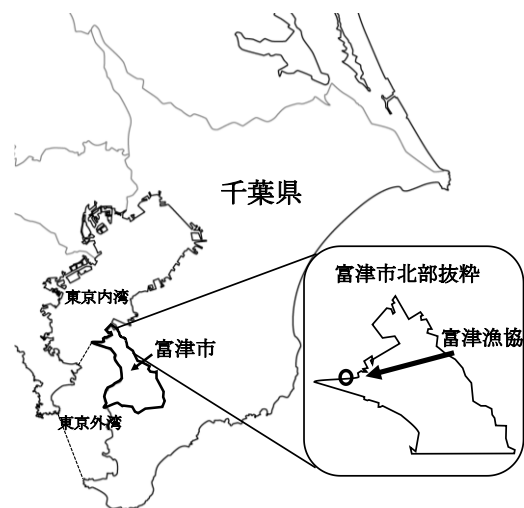


図1 富津市の位置図

2. 漁業の概要

富津漁業協同組合（以下「富津漁協」という。）の令和6年度の組合員数は正組合員86人（うち女性1人）、准組合員19人（うち女性9人）、計105人である。栄養豊富な多くの河川が流入する東京湾の環境と遠浅の地形を活かして明治時代からノリの養殖業が盛んで、令和6年度の生産枚数は1,200万枚、生産金額は3億6,000万円と、県内でも有数のノリの産地である。

また、小型機船底びき網漁業（以下「小型底びき網漁業」という。）、潜水器漁業、固定式刺し網漁業、採介藻漁業など多様な漁法により、タチウオやシロギス、白ミル（ナミガイ）、サヨリ、カマス類、スズキ、ホンビノスガイ、コウイカ、アサリ、マコガレイ、クルマエビなど、江戸前の魚介類が多く漁獲されている（図2）。令和6年度の魚介類の年間水揚量は342トン、年間水揚金額は3億円となっている。また、3月中旬から7月末まで実施している潮干狩り事業では年間約10万人が訪れ、地域の観光産業の一翼を担っている。

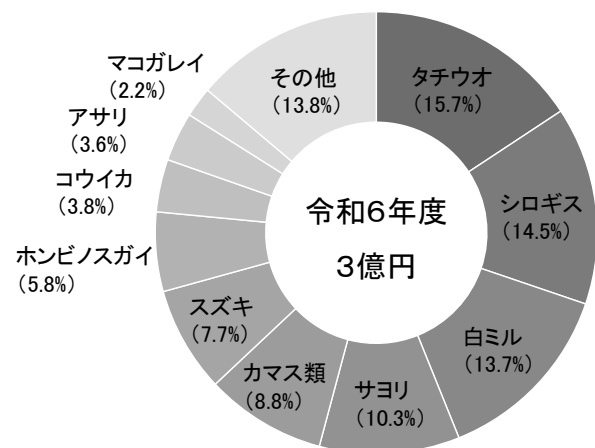


図2 富津漁業協同組合の水揚金額

3. 組織と運営

私が乗船する浜武丸は、昭和61年に義父が小型底びき網漁業とサヨリの船びき網漁業のために建造した総トン数9.7トンの漁船である。当初は夫と義父の親子2人で操業していたが、令和4年からは義父が船を降り、私と夫の2人での操業となった。

私たち夫婦は季節により魚種や時間を変えながら、操業をしている（表1）。一方、5月～7月は富津漁協の潮干狩りのチケット販売を担うなど、漁協の運営にも携わっている。

表1 浜武丸の年間操業スケジュール

魚種	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
アジ	■									■		
クロダイ	■									■		
スズキ	■									■		
ナマコ	■									■		
ヒイラギ	■									■		
コウイカ		■	■					■				
アナゴ	■	■	■	■	■	■						
サルエビ	■	■	■	■	■	■						
コチ			■	■	■	■						
カワハギ					■	■	■	■				
クルマエビ					■	■	■	■	■			

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

私は富津漁協の近くの木更津市金田地区でノリ養殖業や採介藻漁業を営む漁家で育った。私が子どもの頃は親と一緒に海に出てノリ網の支柱を立てるなど、仕事の手伝いをすることもあったが、普段漁業で忙しい両親はほとんど家におらず、他の家庭が羨ましくなることもあった。幼い頃から漁業の大変さを目の当たりにしていた私は「そんな生活はできないし、子どもが小さい時はそばにいてあげたい」と考え、将来漁業に関わろうとはこれっぽっちも思っていなかった。隣町の富津漁協で小型底びき網漁業に従事する夫と結婚した時も、私を海には出させないと夫に約束させたくらいだった。夫は義父と2人で船に乗り、小型底びき網漁業で稼ぐ一方、私は3人の子供の出産や子育てを担い、現在50代になった。

これまで漁業へ関与してこなかった私だが、子育てが一段落したことで現在は夫と夫婦2人で船に乗り、小型底びき網漁業に従事するようになった。私のような子育てを終えた女性が夫とともに漁業に従事するようになった経験を発表することで、全国的に新規就業者の確保が困難な令和の時代における漁家経営の在り方の一つとして、参考となれば幸いである。

5. 研究・実践活動状況及び成果

(1) 夫婦船の始まり

私の夫は漁業士会副会長や内湾底びき網連絡協議会会長を歴任するなど地域でも名の知れた漁業者であり、長期にわたって義父と親子で小型底びき網漁業を操業してきた。しかし、令和4年に義父は80歳を迎えると、夏場は熱中症になるなど体調の優れない時が日に日に増えていった。

夫は複雑で狭い好漁場をピンポイントで狙って網を落とすため、操船しながらの投網を一人で

行うのは大変難しく、義父が船に乗れないような時には、誰かが代わりに船に乗る必要があった。

私たち夫婦には3人の子どもがいるが、3人とも漁業とは異なる仕事に就き、義父が船に乗れなくなってきた頃には既に家にいなかったため、子どもたちが義父の代わりに船に乗る選択肢はなかった。

漁業への新規就業者が少なく新たに人を雇うことが困難である中、夫の仕事を助けられるのは私しかないと思った。これまで漁業に関わろうとは思っていなかった私だが、漁家で育ったため漁業は家族で支えるものというのも理解はしていた。また、子どもたちが独り立ちしており、漁業よりも優先していた子育てがなくなっていたことも大きかった。私は「ついに私の番が回ってきた。」と覚悟を決め、夫から頼まれるでもなく義父の代わりとして、乗船する回数が日に日に増えていき、令和4年には完全に夫婦での操業になった。

私の主な役割は網のウインチ操作と魚の選別、クーラーボックスへの収容で、このうちウインチ操作とクーラーボックスへの収容は私一人で担当している。

(2) 夫婦で操業するための工夫

① 操業形態の工夫

周囲の男性漁業者と比較して体力が劣る私が船上で漁業に従事できているのは、夫が操業形態を工夫してくれているおかげである。

夫と義父で操業していた時は、網上げ後、次の場所で網をひきながら漁獲物の選別作業を行っていたが、私が乗船するようになってからは、安全を第一に考え、網上げ後は一旦船を停めて2人で選別を行い、選別を終えてから投網するようになった。

小型底びき網漁業では網を底の岩礁に引っ掛けてしまうと、船が大きく傾くなど危険と隣り合わせである。以前、岩礁に引っかかり船が大きく傾いた時には、船室にいたため転落するようなことにはならなかったが、デッキで選別をしていたらと思うと怖くなる。操業効率は落ちるものの、夫が安全に配慮して操業してくれているから安心して船に乗ることができている。

また、網をひいている間は休憩時間となるため、体力の消耗が抑えられ、10時間に及ぶ船上作業にも耐えることができている。

2人で選別することで、安全操業だけでなく、選別時間が短くなり、漁獲物を速やかに氷冷することができることから、特に夏場の鮮度低下を防ぎ、漁獲物の鮮度向上にもつながっている。

さらに、漁獲物(図3)は大・中・小に分けて氷冷し、仲買人に売り渡しているが、これまでは網をひいている限られた時間で選別を終えないといけなかったため、サイズを丁寧に揃えることができていなかった。私と2人で選別するようになってからは、時間に余裕が生まれたことと私の几帳面な性格が相まって、サイズが揃っていると仲買人からの評判も良くなった。

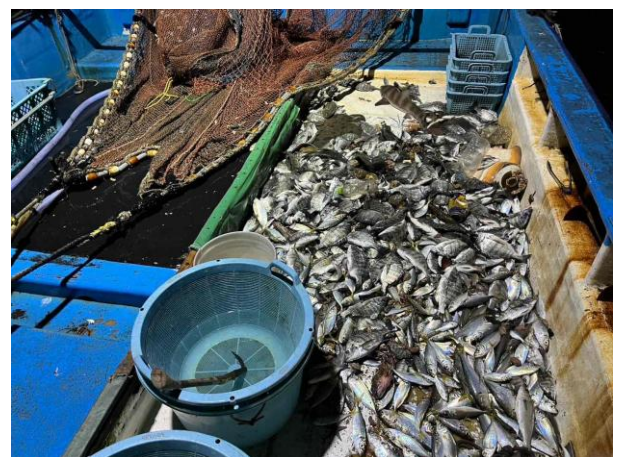


図3 選別前の漁獲物
(アジやクロダイ、ヒイラギなど)

② 夫婦関係での工夫

工夫をしているのは夫だけではなく、私も工夫をしている。夫は温厚で明朗快活な性格だが、漁労作業中はせわしないため、言葉が感情的になる時がある。船上では夫の時間を奪わないように、一回聞いたことは繰り返し聞かないように工夫している。例えば、漁獲したアジを氷冷する際には、眼や体表の色が白くならないように氷と海水の分量の調整が重要であるが、目安は一度聞いたきりで、あとは私の感覚で行っている。

また、陸では夫とちょっとした距離を取るよう工夫している。2人で操業するようになってからは、自然と夫婦で過ごす時間が増えたが、陸ではお互いに一人の時間を作るようにしている。夫は漁協副組合長の仕事などで外出することが多い一方、私は女性部の活動に参加し、行動を共にする時間を少し減らしている。お互いに程よい距離感を保っていることが仲の良い夫婦を続けられる秘訣だと思う。

③ 生活面での工夫

漁業に従事してからは、食事の準備を頑張らないことにした。昼に出漁するか夜に出漁するかは天気次第であり、夜の出漁に備えて昼に寝ていたのに、夜ではなく翌朝に出漁となることがある。不規則な生活リズムに対応するため、調理は簡便化することにした。簡素な料理でも夫は理解してくれ、生活リズムを合わせることに集中できている。

(3) 夫婦で操業するという事への周囲の反応

県内では、一部の地区で女性を船に乗せることを避けると聞かすが、富津の小型底びき網漁業ではそのような慣習はないことから、乗船することに障壁はなかった。

また、富津漁協の中では夫婦で操業している船が少なく、漁協内外の人から船に乗ることに不安はなかったのかとよく聞かれるが、幸い私は両親が漁業者として働いていたのを見ていたことや夫の配慮があったため、大変ではあるが辛いと思わずに従事できている。漁協職員からは女性で漁労作業に従事していることに対してすごいと声を掛けてもらうこともあり、漁協内で受け入れてもらっていると実感し、周囲の方々の温かいまなざしに感謝している。

(4) 夫婦船を始めたときの楽しみや苦労

夫と共に漁に出始めたときは船酔いをして苦しい時もあったが、今では慣れて小型底びき網漁業の魅力をより感じられるようになってきている。私が特に感動したのは夏から秋にかけて漁獲しているクルマエビの漁獲風景である。夜の操業でクルマエビが大量に入網した時は、船の明かりに照らされたクルマエビが生命感あふれる例えようのない輝きを放ち圧巻だった(図4)。その他にも陸上では見られない風景がたくさん広がっており、漁業の魅力はここにあると実感している。

また、漁獲されたアナゴを選別する際に、



図4 クルマエビの選別

私が5本しか掴めていない中、夫は20本掴んでおり、「こうやって掴むんだよ。」と自慢気にコツを教えてくれるのも楽しい時間である。夫は願いが一つ叶うなら何をお願いするか聞かれた際に「魚のいる場所を教えてもらいたい。」と言うほど漁業が大好きであり、そんな夫の生き活きとした姿が見られるのも夫婦で操業する良さだと感じている。

6. 波及効果

富津漁協内では夫婦で操業する船が他に2隻しかいないものの、近隣の漁協ではノリ養殖業を辞めた人が夫婦で小型底びき網漁業を行うなど地域では夫婦船に取り組む人もいと聞いている。新規就業者の確保が難しい中、若い漁業者だけでなく、私のような出産や子育てが落ち着いた女性が操業に関与することも操業形態の一つとして考えられると思う。夫婦で操業するメリットとして、お互いに人となり分かっているため意思疎通が重要な船上作業が円滑に進むことや、家庭での生活リズムが合わせられることが挙げられる。また、家族以外の乗組員を雇わないため、乗組員の生計を背負わず夫婦で目標を設定できる。私たちのように夫婦で操業している先例を見せることで、一人でも多くの女性が船上で活躍してみたいと思ってくれると嬉しい。

7. 今後の課題や計画と問題点、展望

(1) 今後の漁業への女性の参加について

夫婦で漁労作業に従事していく上で重要なことは、夫が妻の体力に配慮することだと思う。どうしても力が必要な仕事は男性に代わることは難しいが、ウインチ操作や選別作業であれば女性でも代わるができる。漁業種類によって作業内容は様々だと思うが、船上での役割分担を明確化することで、女性でも活躍できる作業はあると感じている。

また、漁労作業は海中への転落や機械の巻き込みなどによる事故と隣り合わせであり、高齢漁業者が一人で乗船していると事故が増加したり、発覚が遅れたりする可能性がある。船上での作業は大変なことも多いが、夫婦2人で乗船していることで、夫を一人で送り出すより安心できている。

(2) 今後の私の目標について

今後、漁業に魅力を感じて若手漁業者が増えれば嬉しいが、多様な働き口がある現在では、私の子どもたちのように漁家で育った子どもが漁業に就業しないこともある。私たちができることは、工夫をすれば夫婦2人で楽しく・長く・安心して漁業ができると示すことであると考えている。

小型底びき網漁業は長時間船上に拘束される体力勝負の仕事だけに夫婦どちらかの体調が悪化すれば成り立たないが、私たちは人を雇っているわけではない。私たち夫婦のペースで操業日数や操業時間をコントロールできるため、お互いの体調に合わせて、臨機応変に対応しながら、長く漁業を続けられるよう頑張っていきたい。

また、富津漁協が実施している潮干狩り事業も積極的に手伝っていきたい。潮干狩りは多くの観光客を呼び込み、地域の活性化にも貢献する一大産業となっており、浜が人で埋め尽くされる光景は見ていると嬉しい。現在、私もチケット販売のスタッフとして潮干狩り事業に携わっており、多忙な時期は小型底びき網漁業の操業日数が減少するが、私が住み慣れた富津地区の活気を将来にわたって残していくためにも潮干狩り事業を支え、活気にあふれた富津漁協を残していきたい。